竹村公太郎

Takemura Kotaro

日本史の謎は「地形」で解ける

文明・文化篇

PHP文庫

第12章
「小型化」が日本人の得意技になったのはなぜか
「縮み志向」の謎
78kmの強歩大会 223／iPodもだめ 224／「縮み」志向の日本人 225
縮める日本人 227／なぜ、縮めるのか？ 228／歩く人々 229
日本列島を歩く 230／縮める楽しみ 234／未来を救う日本人 236

第13章
日本の将棋はなぜ「持駒」を使えるようになったか
地形が生んだ不思議なゲーム
坂の上の雲 241／賭博将棋 243／不思議な日本将棋 244
チェスの伝播と日本将棋の誕生 246／木村九段の説「伝播と進化」 247

なぜ、平型になったのか？ 252／歩いて担ぐ日本人 253
庶民たちの日本将棋の物語 255／必然の日本将棋 257

第14章

なぜ日本の国旗は「太陽」の図柄になったか

気象が決める気性

国の旗 261／熱帯で生きる原則 263／苦役の労働 266
喜びの労働 268／太陽との距離感 269／日本のめまぐるしい気象 271
不条理な日本列島 274／「永遠」 278／「無限」と「絶対」 279
気象がつくる文明 282

第13章

日本の将棋はなぜ「持駒」を使えるようになったか

地形が生んだ不思議なゲーム

世界中のチェス系のゲームで、日本の将棋ほど不思議なゲームはない。なにしろ取った敵の駒が、自らの駒として使えるようになるからだ。

この日本将棋の不思議さを巡って、将棋界を中心に論争が繰り広げられていた。傍観者だった私も、その論争に入っていくこととなった。気になったことがあったからだ。それは「なぜ、将棋の駒が平型になったか」であった。

日本将棋の最大の特徴は「敵の駒が持駒になると、今度は味方の駒として使える」ことだ。このルールができたのは「駒が平型になったから」である。この点は誰も異論がない。

駒が平型になったので、漢字で駒の役割を表現することとなった。尖った形にして前進方向を示すことができた。そして、駒の裏に漢字を書き、同じ駒なのに異なった働きをさせることができた。そして遂には、取った敵の駒を使用できるようにしてしまった。

将棋界の論争では「なぜ平型になったか」はパスしている。将棋の素人の私は、この一点に絞っている。「なぜ、日本将棋は平型になったか」だ。

その答えは、やはり「日本の地形」にたどり着く。

日曜日の夜、居間で横になってテレビを見ていた私は飛び起きてしまった。

一瞬、ほんの一瞬だったが、ある場面がテレビに出てきたのだ。テレビに顔をつけるようにして見ていたがその場面はもう出てこなかった。

◇坂の上の雲

２００９年12月12日の日曜日の夜、ＮＨＫのスペシャルドラマ司馬遼太郎原作の『坂の上の雲』の第一部の第３回目の「国家鳴動」であった。

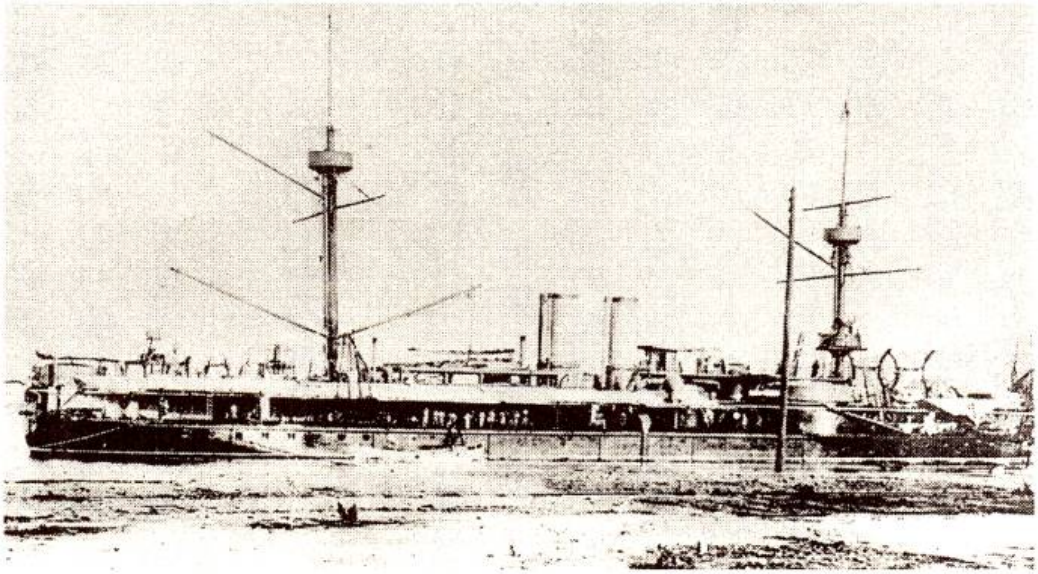
場面は、清国の艦船の上である。

緊張感が走る日清戦争開戦の３年前の１８９１（明治24）年、清国の丁提督率いる北洋艦隊が日本の港を巡回した。７月14日、横浜港に入港した丁提督は旗艦「定遠」に日本の大臣や陸海軍将校や新聞記者５００名を招待した。次ページの**写真１**が「定遠」である。

ここまでは歴史的事実だが、それ以降の場面はフィクションとなっていく。

丁提督に招かれた客の中には、日露戦争の連合艦隊司令長官となる東郷平八郎や

写真１　清国の艦船「定遠」



写真提供：毎日新聞社

作戦担当参謀となった秋山真之がいた。

東郷平八郎は一人パーティーを抜け出し旗艦「定遠」の甲板から艦内に降りていく。東郷が艦内に降りていくのを見た秋山もその後を追うように艦内に降りていく。

東郷と秋山が艦内へ降りると、清国の兵隊たちがだらしなく横になったり、ラーメンを食べたり、将棋をしている。東郷と秋山が艦内の様子を眺めていると、丁提督が現れ二人を誰何（すいか）する場面となる。

横になっていた私が飛び起きたのは、清国の兵隊たちが将棋をしている場面であった。

もちろん日本将棋ではない。中国の象棋（シャンチー）である。

賭博将棋

戦争を模した盤上ゲームはヨーロッパのチェス、インドのチャトランガ、タイのマックルック、中国の象棋、日本の将棋など世界中に数多く存在する。

この起源の説は様々あるが近年の定説では、紀元前にインドで誕生して世界中に広まったとされている。

初期のゲームは相手の駒を取って、そのポイントを競ったものといわれている。もちろん、このゲームは賭博であり、世界中の賭博好きの人々の間に広まっていった。

伝播方法は陸上伝播説と海上伝播説がある。盤と駒の立像のカサを考えると、馬やラクダの背中に乗せて運んだ陸上伝播説より、船旅の時間つぶしの賭博で海上伝播したというのがわかりやすい。その意味で、清国の旗艦「定遠」の艦内で、兵隊たちが時間つぶしに象棋をしていたのは理に合っていた。

翌日、本屋に行って文春文庫『坂の上の雲(1)』を改めて購入した。30年前にこの

本は読んでいたが描写の細部まで覚えていなかった。司馬遼太郎は清国の艦船内部をこのように細かく表現していたのか、という興味であった。しかし、司馬遼太郎氏の原本では、丁提督が関係者を招いたことは記述されていたが、艦船内部の記述はなかった。

テレビドラマの『坂の上の雲』の脚本家たちは、艦内でだらしなく象棋賭博をしている場面によって、清国兵隊たちの士気の低さを表現したかったのだろう。

久しぶりに出来の良い脚本だと感心した。このテレビの脚本に後押しされて、私は頭の中で長い間漂っていた「日本将棋の駒の誕生」のためにパソコンに向かった。

◇不思議な日本将棋

現在、世界中におおよそ100種類ほどある盤上戦争ゲームは、99対1に区分される。99は世界共通の「チェス型」である。孤立している1は日本の「日本将棋」である。

日本将棋だけが世界共通のチェス型と異なるルールで21世紀に至っている。日本将棋だけの特異なルールとは、「敵の駒を取るとその駒を自軍の駒として使用できる」持駒使用である。このルールは世界の他のゲームにはない。日本将棋だけのルールである。

日本将棋のこのルールの理由は「日本人は降伏すると、すぐ敵陣に寝返るから」と酒席で面白おかしく語られる。しかし、世界の戦いの歴史をみれば、降伏すれば敵陣に編入されたり、敵が味方になったり、味方が敵になるのは日常茶飯事であった。決して日本独自の現象ではない。

日本将棋だけの「持駒使用」の謎は、21世紀まで放置されてきた。

その「持駒使用」の謎に挑戦したのが、木村義徳（よしのり）九段であった。

１９９６年から『将棋世界』に連載された「二千年の将棋史」に加筆訂正を加えて、２００１年『持駒使用の謎』が日本将棋連盟から出版された。

この本と出会い私は日本将棋の歴史を学び、日本将棋の謎の解明に至った。

◇――チェスの伝播と日本将棋の誕生

木村義徳九段は故・木村義雄十四世名人の3男で早稲田大学在学中に学生名人とアマ名人、２０００年には九段となり、関西将棋博物館の館長も務めておられた。

木村氏はプロの棋士であり文才豊かな教養人でもある。その木村氏は歴史的事実と各国の将棋ゲームの駒の働きの強弱の類似に注目して、世界のチェス系と日本将棋の歴史を解明している。駒の働きの強弱に注目したところは、人には真似できないプロ棋士ならではの視点であった。

木村九段の著書『持駒使用の謎』の記述はほぼ時系列になっているが、駒の働きの解説部分が多くあり、『将棋の駒はなぜ40枚か』（集英社文庫、２０００年）の著者・増川宏一氏との論争部分が入ってくるので、将棋の専門家以外の人は理解しにくいところがある。

そのため、木村九段が主張する世界チェス系の伝播と日本将棋の誕生の時期を２４８～２４９ページの**図1**に表した。これを参照しつつ木村九段の説を解説する。

木村九段の説「伝播と進化」

紀元前3世紀頃、インドで盤上の戦争ゲーム・チャトランガが誕生した。その盤上ゲームは「立像」で敵味方を「色分け」していた。

インドから東南アジアそして中国と日本へ伝わった。西に向かってアラブからヨーロッパへと伝わった。日本に到着したのは6世紀頃で、この最初の世界への伝播を「第1波」と呼ぶ。

その後、タイのマックルックで一つの改良がなされた。「歩の成り」である。立像では裏返す「成り」はできない。そのため歩の駒だけを平らの駒にしたのだ。このタイでの改良が中国、日本に伝播され、これを「タイの波」と呼ぶ。

251ページの**写真2**は現在のタイのマックルックである。全体の駒は立像だが、歩だけが平らな駒になっているのがわかる。

第1波とタイの波を受けて極東の海に浮かぶ日本で、独自の将棋の進化が開始されていった。

出典：木村義徳九段『持駒使用の謎』（日本将棋連盟）をもとに竹村・大崎作成

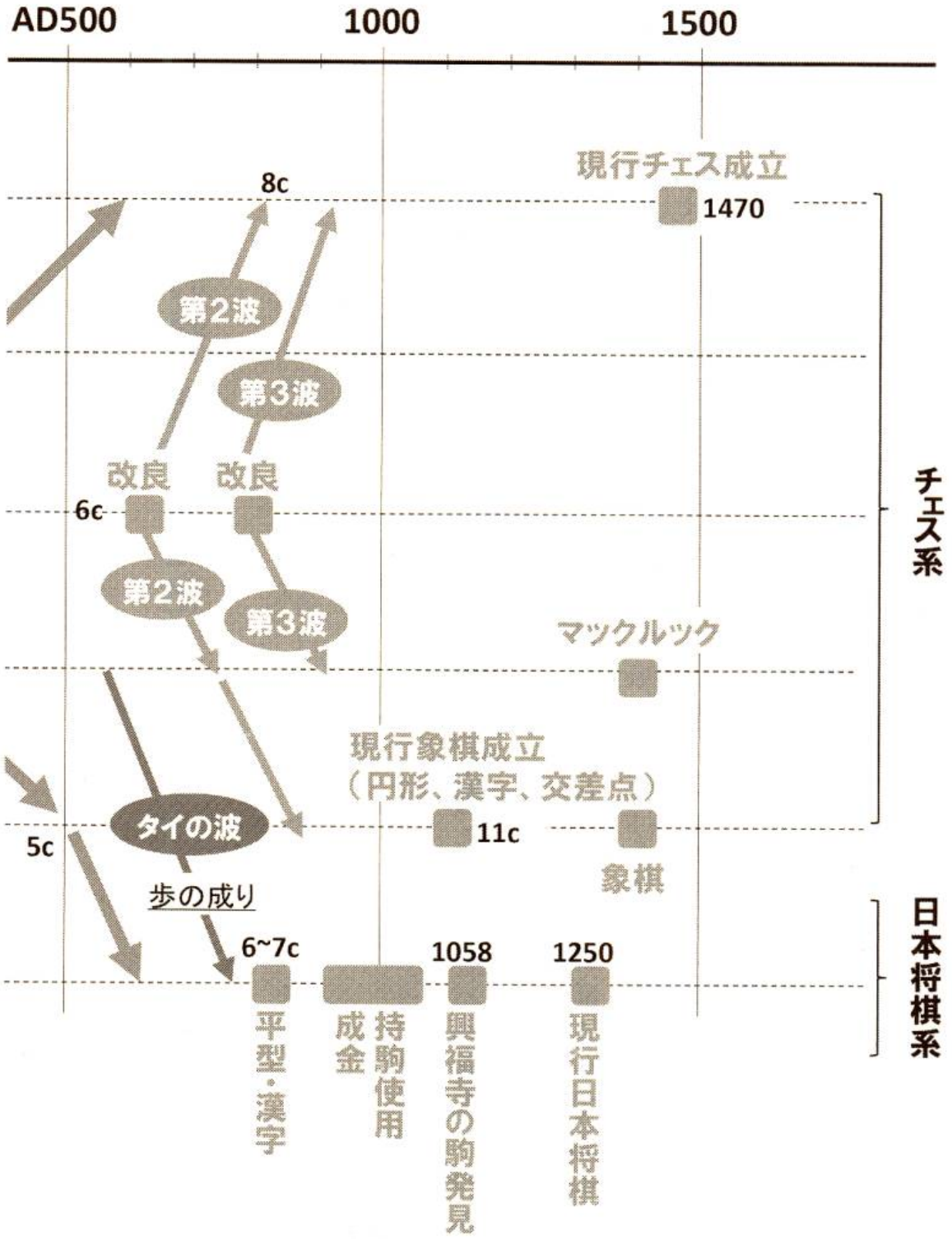
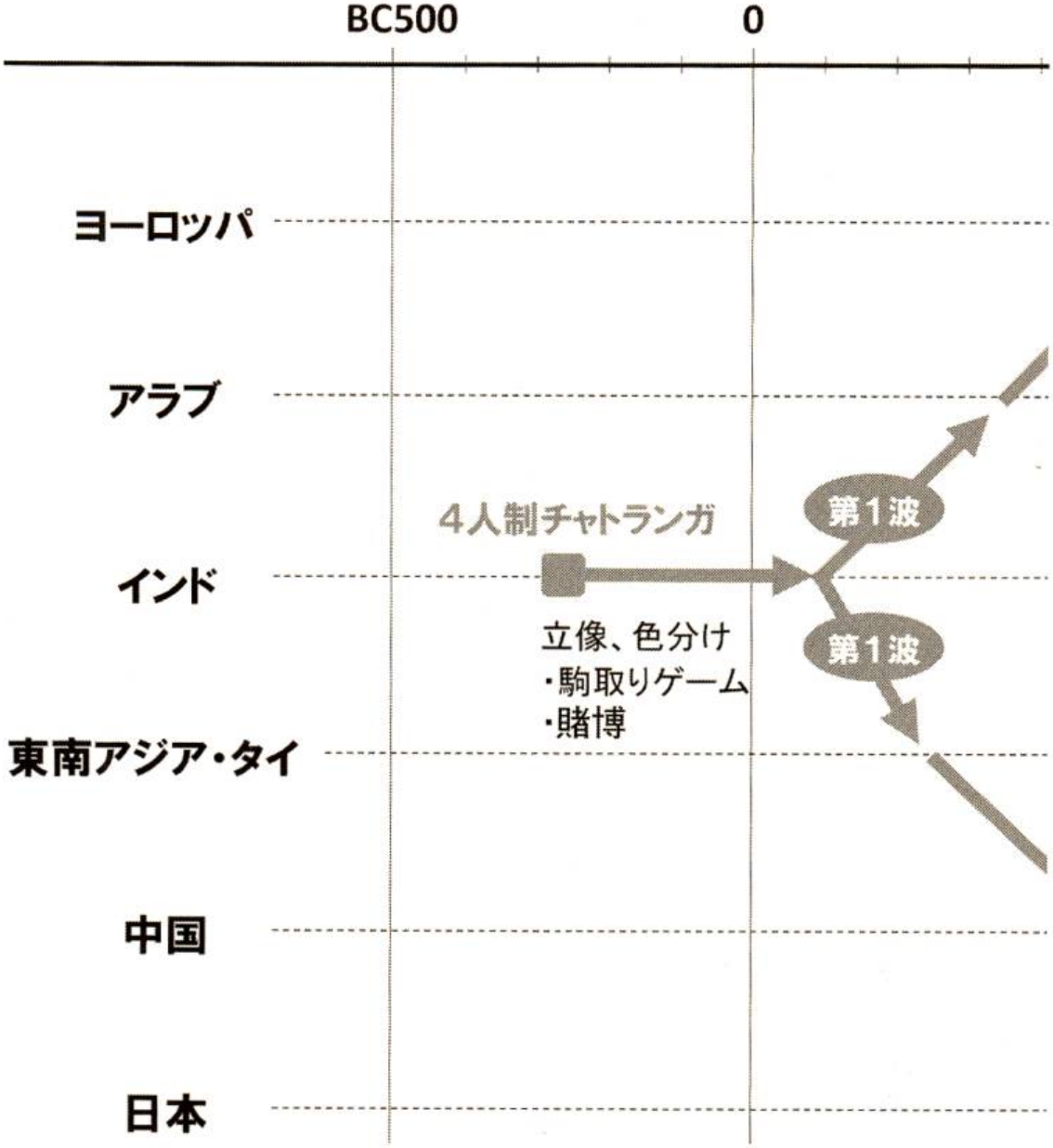


図1　世界チェスと将棋の歴史



第1波　:①立像、色分かれ
タイの波　:①歩だけ偏平木片
②歩の成り

第2波　:駒の強化
日本将棋　:①すべて平型
②多種駒成り
③持駒使用

日本に到達した将棋は、早くも6～7世紀頃「立像から平型」となった。立像の形で表されていた王や軍馬や歩兵は漢字で表された。さらに、敵味方の区別は色区分ではなく、駒を五角形にして、尖った先が進む方向を表すこととなった。

写真3がチェスの立像であり、**写真4**が日本将棋の駒で、五角形の木片に漢字で書かれている。

「平型」で「漢字」で書かれ、敵味方は色の区分ではなく「五角形の方向」で表す日本将棋へと改良された。この将棋の道具の改良から日本将棋独特の「持駒使用」ルールが生まれることとなった。

日本将棋の道具の改良が、日本将棋のルールの進化につながった。

ルールの進化があって道具が変わったのではない。道具が変わったからルールが変わった。

以上が、木村九段の歴史的推理の主要な部分である。本書には将棋ルールやゲーム形式の変遷が詳しく述べられているが、紙面の制約もあり省略した。

木村九段の推理は合理的である。独特の進化を遂げた日本将棋をわかりやすく整理し、解明している。